

[B年] 降誕節第1主日(2021年12月26日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書49章7～13節**

- 7 イスラエルを贖う聖なる神、主は
人に侮られ、国々に忌むべき者とされ
支配者らの僕とされた者に向かって、言われる。
王たちは見て立ち上がり、君侯はひれ伏す。
真実にいますイスラエルの聖なる神、主が
あなたを選ばれたのを見て。
- 8 主はこう言われる。
わたしは恵みの時にあなたに答え
救いの日にあなたを助けた。
わたしはあなたを形づくり、あなたを立てて
民の契約とし、国を再興して
荒廢した嗣業の地を継がせる。
- 9 捕らわれ人には、出でよ
闇に住む者には身を現せ、と命じる。
- 彼らは家畜を飼いつつ道を行き
荒れ地はすべて牧草地となる。
- 10 彼らは飢えることなく、渇くこともない。
太陽も熱風も彼らを打つことはない。
憐れみ深い方が彼らを導き
湧き出る水のほとりに彼らを伴って行かれる。
- 11 わたしはすべての山に道をひらき
広い道を高く通す。
- 12 見よ、遠くから来る
見よ、人々が北から、西から
また、シニムの地から来る。
- 13 天よ、喜び歌え、地よ、喜び躍れ。
山々よ、歓声をあげよ。
主は御自分の民を慰め
その貧しい人々を憐れんでくださった。

【使徒書日課】 ヨハネの黙示録21章22節～22章5節

21 22わたしは、都の中に神殿を見なかった。
全能者である神、主と小羊とが都の神殿だからで
ある。23この都には、それを照らす太陽も月も、必
要でない。神の栄光が都を照らしており、小羊が
都の明かりだからである。24諸国の民は、都の光の
中を歩き、地上の王たちは、自分たちの栄光を携
えて、都に来る。25都の門は、一日中決して閉ざさ
れない。そこには夜がないからである。26人々は、
諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る。27し
かし、汚れた者、忌まわしいことと偽りを行う者

はだれ一人、決して都に入れぬ。小羊の命の書
に名が書いてある者だけが入れぬ。

22 1天使はまた、神と小羊の玉座から流れ出
て、水晶のように輝く命の水の川をわたしに見せ
た。2川は、都の大通りの中央を流れ、その兩岸に
は命の木があって、年に十二回実を結び、毎月実
をみのらせる。そして、その木の葉は諸国の民の
病を治す。3もはや、呪われるものは何一つない。
神と小羊の玉座が都にあって、神の僕たちは神を
礼拝し、4御顔を仰ぎ見る。彼らの額には、神の名
が記されている。5もはや、夜はなく、ともし火の
光も太陽の光も要らない。神である主が僕たちを
照らし、彼らは世々限りなく統治するからである。

【福音書日課】 マタイによる福音書2章1～12節

1イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘ
ムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者
たちが東の方からエルサレムに来て、2言った。「ユ
ダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこに
おられますか。わたしたちは東方でその方の星を
見たので、拝みに来たのです。」3これを聞いて、
ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、
同様であった。4王は民の祭司長たちや律法学者た
ちを皆集めて、メシアはどこに生まれることにな
っているのかと問いただした。5彼らは言った。「ユ
ダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いていま
す。

6 『ユダの地、ベツレヘムよ、
お前はユダの指導者たちの中で
決していちばん小さいものではない。
お前から指導者が現れ、
わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』

7そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼
び寄せ、星の現れた時期を確かめた。8そして、「行
って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら
知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言って
ベツレヘムへ送り出した。9彼らが王の言葉を聞いて
出かけると、東方で見た星が先立って進み、つ
いに幼子のいる場所の上に止まった。10学者たち
はその星を見て喜びにあふれた。11家に入ってみ
ると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひ
れ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳
香、没薬を贈り物として献げた。12ところが、「ヘ
ロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったの
で、別の道を通して自分たちの国へ帰って行った。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書49章7～13節

7 イスラエルの贖い主、聖なる方である主は
人に蔑まれている者、国民に忌み嫌われている者
支配者らの僕に向かって、こう言われる。
「王たちは見て立ち上がり、高官たちはひれ伏す。
真実であり、イスラエルの聖なる方である主が
あなたを選んだからである。」

8 主はこう言われる。
私は恵みの時にあなたに
救いの日にあなたを助けた。
私はあなたを守り
あなたを民の契約とし、地を再興して
荒れ果てた相続地を継がせよう。

9 捕らわれ人には「出て来い」と言い
闇の中にいる者には「姿を見せよ」と言う。
彼らは草を食みながら道を行き
不毛の丘の至るところが彼らの牧草地となる。

10 彼らは飢えること渴くこともなく
熱風も太陽も彼らを打つことはない。
彼らを憐れむ方が導き
水の湧く所に連れて行かれるからだ。

11 私はすべての山々を道に変え
私の大路を高くする。

12 見よ、人々が遠くから来る
見よ、北からも西からも
また、シニムの地からも来る。

13 天よ、喜び歌え、地よ、喜べ。
山々よ、歓声を上げよ。
主がご自分の民を慰め
その苦しむ者を憐れまれるからだ。

ヨハネの黙示録21章22節～22章5節

21 22私は、この都の中に神殿を見なかった。
全能者である神、主と小羊とが神殿だからである。
23この都には、それを照らす太陽も月も、必要でない。
神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。
24諸国の民は、都の光の中を歩き、地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて都に来る。
25都の門は、終日閉じることがない。そこには夜がないからである。
26人々は、諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る。
27しかし、汚れた者、忌まわしいことや偽りを行う者は誰一人、都に入

れない。小羊の命の書に名が書いてある者だけが入ることができる。

22 1天使はまた、神と小羊の玉座から流れ出て、水晶のように光り輝く命の水の川を私に見せた。
2川は、都の大通りの中央を流れ、その両岸には命の木があって、年に十二回実を結び、毎月実を実らせる。その木の葉は諸国の民の病を癒す。
3もはや、呪われるものは何一つない。神と小羊の玉座が都にあって、神の僕たちは神を礼拝し、
4御顔を仰ぎ見る。彼らの額には、神の名が記されている。
5もはや夜はなく、灯の光も太陽の光も要らない。神である主が僕たちを照らすからである。
そして、彼らは世々限りなく支配する。

マタイによる福音書2章1～12節

1イエスがヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、東方の博士たち〔別訳→占星術の学者たち〕がエルサレムにやって来て、
2言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」
3これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。
4王は祭司長たちや民の律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。
5彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

6 『ユダの地、ベツレヘムよ、
あなたはユダの指導者たちの中で
決して最も小さな者ではない。
あなたから一人の指導者が現れ、
私の民イスラエルの牧者となるからである。』

7そこで、ヘロデは博士たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。
8そして、こう言ってベツレヘムへ送り出した。「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせしてくれ。私も行って拝むから。」
9彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子がいる場所の上に止まった。
10博士たちはその星を見て喜びに溢れた。
11家に入ってみると、幼子が母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香〔フランキンセンス〕、没薬〔ミルラ〕を贈り物として献げた。
12それから、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・12月26日「降誕節第1主日」の日課主題は「東方の学者たち」。西方教会の伝統では、「東方の学者たちの来訪」は「公現日(エピファニー)」(1月6日)に記念されてきた。一方、東方教会の伝統では、「公現日」に記念されるのは、おもに「キリストの洗礼」の出来事であり、一連の降誕物語の頂点をここに見ている。これに対応するように、西方教会には、「公現」を記念した後の主日に「キリスト洗礼の主日」を設定し、ここまでを「降誕節」とみなす習慣もある。教団の「新しい教会暦」が「東方の学者たち」の記念を「降誕節第1主日」に置くのは、固定祝日である「公現日」が軽視される現代教会の傾向に抗するための判断もあるのだろう。なお、現代の西方主流教会が用いる改訂共通聖書日課表では、「降誕節第1主日」は「聖家族」を記念する主日とされている。

旧約日課(イザヤ49章より)

・「イザヤ書」は、ヘブライ語正典「律法と預言者」の中でも初代教会に大きな影響を与えたと考えられる預言書。一般に「第一イザヤ」と呼ばれる前半(～39章)と、「第二イザヤ」と呼ばれる後半(40章～)で、背景となっている時代が大きく異なるにもかかわらず、初代教会は、本預言書全体から主イエスの神学的位置づけを与える預言を読みとっていたと考えられる。例えば、「第一イザヤ」からは、預言者イザヤの時代(前700年前後)に王国存亡の危機にあった南王国で王位継承者(ヒゼキヤ王)の誕生が告げられた預言(7章、9章、11章など)が、「ダビデの子」としての位置づけを主イエスに付与する預言として解釈され、「第二イザヤ」からは、「荒れ野で呼ばわる者」を先駆者とする主の言葉の宣教者として呼び出される「主の僕／苦難の僕」が、洗礼者ヨハネの宣教を継承して神の国の福音宣教を開始され、最終的に十字架死の苦難を受けられた主イエスの公生涯を示す預言として解釈され、新約諸文書に反映されている。聖書日課表では、待降節中に「第一イザヤ」の関連箇所から、降誕節に入った後は「第二イザヤ」の関連箇所から設定される傾向にある。

・日課箇所は、「第二イザヤ」中、42章から描かれる「主の僕」の使命が預言されているとされる箇所。著者預言者が「主の僕」によって指し示したのが何者であるのかは諸説あり、教理上の正統解釈はない。「主が油注がれた人キュロス」(43章)を指すとする説もあるが、「主の僕」は概して「人に侮られ、国々に忌むべき者とされ」た者と見られており、歴史上の帝国支配者であるペルシャ王キュロスは適さない。

使徒書日課(黙示録21～22章より)

・「ヨハネの黙示録」は、新約正典の最終巻として置かれている黙示文学様式を用いた文書で、他の使徒書

同様に書簡形式で作成され諸教会間で回覧・保存され、次第に受け入れられたと考えられる。ただし、教会史上、広く正典として承認されるようになったのは、「ペトロの手紙二」などと同様、4世紀末、キリスト教会がローマ帝国で国教化された後のことである。

・本書は、黙示文学様式による隠語表現でローマ帝国の強権の支配を批判するような言説があり、1世紀の散発的な迫害を指示したネロ帝やドミティアヌス帝を暗に指して批判しているとされる記述も見られる。にもかかわらず、本書の教えの主旨は、迫害に抵抗することではなく、むしろ受忍して終末的な神の支配による解決に期待を置くように勧めるところにある。

・日課箇所は、本書の語る啓示(＝黙示)内容の最終盤に当たり、編集過程の途上では本書末尾になっていたとも考えられる箇所(本書には、冒頭および末尾に二段階の編集過程＝三層構造を推認させる叙述が見られる)。この最終啓示内容は、終末的な新天地の実現であり、天と地の一致というイメージを用いて、神の臨在が人の間に完全に実現することを指し示そうとしている。これらの終末観は、旧約預言書等からの影響を受けながらも、破滅的・破壊的であるよりは建設的・構築的な表現が強く、旧約預言書の終末観とは一線を画する。その背景には、初期キリスト教会がファリサイ派ユダヤ教などと共有していた「終末の復活」信仰に基づく「最後の審判」などに見られる終末観を単純に受け入れたのではない、地上の教会の営みの完成として「神の国」建設の使命を目標として掲げるようになる時代の教会の信仰があるのではないかと考えられる。

福音書日課(マタイ2章より)

・日課箇所は、東方の占星術の学者たちが来訪し、幼子を礼拝する伝承物語。「占星術の学者」または「博士」と訳される「マゴス」は、「魔術師」(使徒13:6,8)とも訳される語であるが、元来は、古代メディア王国でペルシャ系祭司階級を指した古代ペルシア語「マギ／マゴス」で、より一般的には、前6世紀までにペルシア人社会で広く信奉されていたゾロアスター教の祭司・神官を指す用語。アケメネス朝ペルシア時代からヘレニズム時代にかけて、ゾロアスター教に代表されるペルシア系東方宗教思想がオリエント～地中海世界に広く伝播することと軌を一にして、ギリシア語でも音訳使用されるようになったと考えられる。日課箇所の「マゴス」は、伝統的には「賢者」または「王」と解釈されてきた。

・日課箇所が物語る逸話は、後段(13節以下)のヘロデによる幼児虐殺事件の逸話と一体で構成されている。その史実は確かめようがないが、物語の構想は、旧約の「モーセ誕生物語」(出1～2章)や「イザヤ書」60章などを参照している。ある出来事(＝歴史)を叙述するのに、古い資料(旧約など)の叙述を援用するのは、古代においては一般的なことである。

来週の誕生日 (12月26日～1月1日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-246 番「天のかなたから」(= I 101「いずこの家にも」)。M.ルターが自分の子供たちのために作詞作曲。当初は礼拝のための歌とはされていなかったが、次第に礼拝で歌われるようになった。
- ・21-269 番「飼いばおけにすやすやと」(= I)は、17世紀米国で知られるようになったクリスマスキャロル「Away in a manger」で、北米のみならずヨーロッパでも様々な曲と組み合わせられてきた。日本では 1931 年版『讃美歌』で採用されていたが、『讃美歌 21』で再び採用された。
- ・21-256 番「まぶねのかたえに」は、17 世紀最大のドイツ語讃美歌作家と言われるパウル・ゲアハルトの作詞。曲は、J.S.バッハが 1736 年出版の歌曲集にゲアハルトの詞のために作曲寄稿した。
- ・21-262 番「聞け、天使の歌」(= I 98「あめにはさかえ」)は、C.ウェスレーの代表的な作詞、1739 年出版の讃美歌集に収録。1840 年に F.メンデルスゾーンがこの歌詞のために作曲、演奏したものが元になって、広く各国で歌われるようになった。

21-246「天のかなたから」

Vom Himmel Hoch, Da Komm Ich Her

1. Vom Himmel hoch, da komm ich her. / Ich bring' euch gute neue Mär, / Der guten Mär bring ich so viel, / Davon ich singn und sagen will.
2. Euch ist ein Kindlein heut' geborn / Von einer Jungfrau auserkorn, / Ein Kindelein, so zart und fein, / Das soll eu'r Freud und Wonne sein.
3. Es ist der Herr Christ, unser Gott, / Der will euch führn aus aller Not, / Er will eu'r Heiland selber sein, / Von allen Sünden machen rein.
4. Er bringt euch alle Seligkeit, / Die Gott der Vater hat bereit, / Daß ihr mit uns im Himmelreich / Sollt leben nun und ewiglich.
5. So merket nun das Zeichen recht: / Die Krippe, Windelein so schlecht, / Da findet ihr das Kind gelegt, / Das alle Welt erhält und trägt.
6. Des laßt uns alle fröhlich sein / Und mit den Hirten gehn hinein, / Zu sehn, was Gott uns hat beschert, / Mit seinem lieben Sohn verehrt.
7. Merk auf, mein Herz, und sieh dorthin! / Was liegt dort in dem Krippelein? / Wes ist das schöne Kindelein? / Es ist das liebe Jesulein.
8. Sei mir willkommen, edler Gast! / Den Sünder nicht verschmähet hast / Und kommst ins Elend her zu mir, / Wie soll ich immer danken dir?
9. Ach, Herr, du Schöpfer aller Ding, / Wie bist du worden so gering, / Daß du da liegst auf dürrem Gras, / Davon ein Rind und Esel aß!
10. Und wär' die Welt vielmal so weit, / Von Edelstein und Gold bereit, / So wär sie doch dir viel zu klein, / Zu sein ein enges Wiegelein.
11. Der Sammet und die Seide dein, / Das ist grob Heu und Windelein, / Darauf du König groß und reich / Herprangst, als wär's dein Himmelreich.
12. Das hat also gefallen dir, / Die Wahrheit anzuzeigen mir: / Wie aller Welt Macht, Ehr und Gut / Vor dir nichts gilt, nichts hilft noch tut.
13. Ach, mein herzliebes Jesulein, / Mach dir ein rein, sanft Bettelein, / Zu ruhen in meins Herzens Schrein, / Daß ich nimmer vergesse dein.
14. Davon ich allzeit fröhlich sei, / Zu springen, singen immer frei / Das rechte Susanne schon, / Mit Herzenslust den süßen Ton.
15. Lob, Ehr sei Gott im höchsten Thron, / Der uns schenkt seinen ein'gen Sohn. / Des freuen sich der Engel Schar / Und singen uns solch neues Jahr.

21-269「飼いばおけにすやすやと」

Away in a manger

1. Away in a manger, no crib for a bed, / the little Lord Jesus laid down his sweet head. / The stars in the sky looked down where he lay, / the little Lord Jesus, asleep on the hay.
2. The cattle are lowing, the baby awakes, / but little Lord Jesus, no crying he makes; / I love thee, Lord Jesus, look down from the sky / and stay by my cradle till morning is nigh.
3. Be near me, Lord Jesus, I ask thee to stay / close by me forever, and love me, I pray; / bless all the dear children in thy tender care, / and fit us for heaven to live with thee there.

21-256「まぶねのかたえに」

Ich steh an deiner Krippen hier

1. Ich steh an deiner Krippen hier, / o Jesu, du mein Leben; / ich komme, bring und schenke dir, / was du mir hast gegeben. / Nimm hin, es ist mein Geist und Sinn, / Herz, Seel und Mut, nimm alles hin / und laß dir's wohlgefallen.
2. Da ich noch nicht geboren war, / da bist du mir geboren / und hast mich dir zu eigen gar, / eh ich dich kannt, erkoren. / Eh ich durch deine Hand gemacht, / da hast du schon bei dir bedacht, / wie du mein wolltest werden.
3. Ich lag in tiefster Todesnacht, / du warest meine Sonne, / die Sonne, die mir zugebracht / Licht, Leben, Freud und Wonne. / O Sonne, die das werthe Licht / des Glaubens in mir zugericht, / wie schön sind deine Strahlen!
4. Ich sehe dich mit Freuden an / und kann mich nicht satt sehen; / und weil ich nun nichts weiter kann, / bleib ich anbetend stehen. / O daß mein Sinn ein Abgrund wär / und meine Seel ein weites Meer, / daß ich dich möchte fassen!
5. Wann oft mein Herz im Leibe weint / und keinen Trost kann finden, / rufst du mir zu: „Ich bin dein Freund, / ein Tilger deiner Sünden. / Was trauerst du, o Bruder mein? / Du sollst ja guter Dinge sein, / ich zahle deine Schulden.“
6. O daß doch so ein lieber Stern / soll in der Krippen liegen! / Für edle Kinder großer Herrm / gehören güldne Wiegen. / Ach Heu und Stroh ist viel zu schlecht, / Samt, Seide, Purpur wären recht, / dies Kindelein drauf zu legen!
7. Nehmt weg das Stroh, nehmt weg das Heu, / ich will mir Blumen holen, / daß meines Heilands Lager sei / auf lieblichen Viole; / mit Rosen, Nelken, Rosmarin / aus schönen Gärten will ich ihn / von oben her bestreuen.
8. Du fragest nicht nach Lust der Welt / noch nach des Leibes Freuden; / du hast dich bei uns eingestellt, / an unsrer Statt zu leiden, / suchst meiner Seele Herrlichkeit / durch Elend und Armseligkeit; / das will ich dir nicht wehren.
9. Eins aber, hoff ich, wirst du mir, / mein Heiland, nicht versagen: / daß ich dich möge für und für / in, bei und an mir tragen. / So laß mich doch dein Krippelein sein; / komm, komm und lege bei mir ein / dich und all deine Freuden.

21-262「聞け、天使の歌」

Hark! the Herald Angel Sing

1. Hark! the herald angels sing, / "Glory to the new born King, / peace on earth, and mercy mild, / God and sinners reconciled!" / Joyful, all ye nations rise, / join the triumph of the skies; / with th' angelic host proclaim, / "Christ is born in Bethlehem!" / Hark! the herald angels sing, / "Glory to the new born King!"
2. Christ, by highest heaven adored; / Christ, the everlasting Lord; / late in time behold him come, / offspring of a virgin's womb. / Veiled in flesh the Godhead see; / hail th' incarnate Deity, / pleased with us in flesh to dwell, / Jesus, our Emmanuel. / Hark! the herald angels sing, / "Glory to the new born King!"
3. Hail the heaven-born Prince of Peace! / Hail the Sun of Righteousness! / Light and life to all he brings, / risen with healing in his wings. / Mild he lays his glory by, / born that we no more may die, / born to raise us from the earth, / born to give us second birth. / Hark! the herald angels sing, / "Glory to the new born King!"